

令和 3 年 5 月 10 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02972

研究課題名(和文)「英語コミュニケーション」の自己認識と言語活動の関わりを探る有機的研究

研究課題名(英文) Ecological research on relationship between perception of English communication and language use

研究代表者

柴田 美紀 (shibata, Miki)

広島大学・人間社会科学研究科(総)・教授

研究者番号：90310961

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、まず日本人英語学習者(大学生)の「英語コミュニケーション」の解釈を調査した。記述式アンケートの結果、コミュニケーションの究極の目的は相互理解で、そのためには文法や発音ではなく「伝えようとする気持ち」が必要であるという解釈が明らかになった。また、対話者が母語話者か非母語話者かによって表出するアイデンティティが異なる。

次にEMIにおける日本人学生の英語コミュニケーションについて、グループディスカッションの録音とインタビューを行った。その結果、日本人学生の消極的参加は日本の教室文化にも起因すると示唆する。さらに日本人学生は英語学習者の立場(position)をとってEMIに参加している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

先行研究で報告されてきた英語力の不足に加え、これまでに構築された教室文化とEMI教室文化との相違が、日本人英語学習者(あるいは使用者)の教室における立場(position)とアイデンティティ構築に影響することを示した点に本研究の学術的意義があると言える。さらに、この点を踏まえて、教室は他者と関わるコミュニティであり、そこでは自己と他者の関係において学習者個人の立場やアイデンティティが常にシフトしていることを教師は実際の教室指導において意識すべきであるという教育的示唆につながる。

研究成果の概要(英文)：This study first explored how Japanese learners of English (university students) interpret English communication by employing a descriptive questionnaire. As a result, most learners prioritize the willingness to convey the ideas/thoughts to counterparts rather than correct grammar and appropriate pronunciation while setting mutual understanding as a ultimate goal of communication. In addition, distinctive identities emerge depending on whether an interlocutor is a native speaker or a non-native speaker of English. Then, class performance of Japanese students was observed in EMI classes. The analysis of recorded data from the group discussion and interview sessions revealed that the passive participation of Japanese students could be ascribed to their lived Japanese classroom culture. In addition, the dichotomy of Japanese students and the international cohort makes their L2 English learner identity salient.

研究分野：応用言語学

キーワード：英語コミュニケーション アイデンティティ 日本人英語学習者 EMI

1. 研究開始当初の背景

グローバル化が加速する昨今、英語力は国力と結びつき、多くの国が国民の英語コミュニケーション能力向上を英語教育の目指にしている。日本も例外ではない。2003年(平成15年)に文部科学省は「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」を策定した。こうした能力を育成するため、日本の英語教育でもコミュニケーション中心の言語活動が奨励されている。しかし、実際には生徒がインタラクションに消極的で教室内で沈黙していることが多い。これは知識伝達型の教室文化にも起因すると考えられる。

一方、「コミュニケーション」は日常的行為であるため、改めてその本質を議論しないことにも原因がある。政策を打ち出す側、教える側、学習する側がみな同じ理解であることを前提にコミュニケーション中心の言語活動が行われていると考えられる。従来、日本の英語教育では、母語話者(アメリカ人やイギリス人)の英語がモデルとして指導されてきた。また、母語話者や彼らの英語を絶対視する傾向は社会イデオロギーとしても存在する(城座, 2014)。このように母語話者英語が強調されれば、学習者は常に「英語学習者」と「非英語母語話者」というアイデンティティを持ち、英語コミュニケーションも英語母語話者をモデルとした、型にはまったスタイル(ステレオタイプ)として理解される。

2. 研究の目的

上述の背景を踏まえ、本研究ではコミュニケーション活動への積極性の欠如に学習者の「英語コミュニケーション」に対する信条やイメージが関わると仮定し、まず、日本人英語学習者の「英語コミュニケーション」の解釈を探る。次に、この解釈が実際の英語コミュニケーションスタイルやストラテジーにどのように現れるかを検証する。調査の結果を踏まえ、インタラクションへの積極的な態度の育成に対して教育的示唆を試みる。

3. 研究の方法

- (1) 「英語コミュニケーション」に対する自己認識(信条およびイメージ)を探るため、日本人英語学習者(大学生)を対象にアンケート調査を行う。「英語でコミュニケーションがうまく行く」とは具体的にどのようなこと(状況、状態、場面)だと思ふかについて記述回答をもらった。アンケート調査は既に2017年度に実施しており、2018年度のデータと併せて分析を行った。教養教育の英語コミュニケーション科目の受講者に参加を依頼し、合計218名が回答した(内訳は、2017年度1年次65名、2年次41名、4年次1名、2018年度1年次111名)。調査は授業開始時の15分で実施した。
- (2) 日本人英語学習者(大学生)の英語コミュニケーションの問題点を探るため、研究代表者が担当する『第二言語習得理論』でグループディスカッションを録音し、日本人学生にフォローアップインタビューを行った。なお、この科目はEnglish-medium instruction(EMI)の授業である。
 - ・参加者：日本人大学生(英語専攻の3年次生)5名と交換留学生6名[アメリカ英語話者2名(男女各1名)・オランダ語母語話者1名(F)・タイ母語話者1名(M)・フィリピン英語話者1名(F)・フランス語母語話者1名(F)]
 - ・データ収集と分析：授業開始時に行われるグループディスカッション合計9つを録音した。さらに、学期終了時にディスカッションの感想と難しかった点について受講者全員に記

述式アンケートを行った。そのうち提出した日本人学生 4 名にフォローアップインタビューを行った。音声データを文字化し、ディスカッションにおける発話回数、内容、タイミングと記述およびインタビューの内容を照らし合わせ、日本人学生が EMI の授業で直面している問題点を検証した。

(1)と(2)で明らかになった結果をもとに、日本人英語学習者が認識する英語コミュニケーションのイメージと、言語態度およびアイデンティティとの関わりを考察する。

注：本研究の申請時には、教室内外での言語使用(コミュニケーション活動)を音声録音・録画し、その後、フォローアップインタビューを行い、(1)で明らかにした自己認識がどのように英語コミュニケーションのスタイルとして現れるかを探る予定であった。しかし、新型コロナウイルスの影響により対面を伴うほぼすべての活動が制限されたため、授業観察はひとつの授業のみである。

4. 研究成果

(1) アンケート調査結果：「英語コミュニケーション」のイメージ

記述回答に使われた語彙の品詞と頻度を分析した結果を表 1 に示す。

表 1 出現語彙の分類

| 名詞 | サ変名詞 | 動詞 | 形容動詞 | 形容詞 | 副詞 |
|------|------|------|------|-----|----|
| 2776 | 977 | 2083 | 282 | 113 | 95 |

注：ひらがな表記のものは除く。

サ変動詞「理解」が頻出し、「相手が言っていることを理解し、同時に相手もこちらが言うことを理解する」「相互理解」「お互いの理解」と言う記述が大半であった。そのサ変動詞「理解(理解する・できる)」と共起していた語彙は表 2 の通りである。

表 2 サ変動詞「理解」と共起していた語彙

| | | | | | |
|---------|---|-------|---|---------|---|
| 正しく/正確に | 5 | 素早く | 2 | きちんと | 1 |
| しっかりと | 3 | 英語のまま | 2 | 詳細に | 1 |
| 完璧に/完全に | 3 | 一文字一句 | 1 | 母国語のように | 1 |
| 十分に | 2 | 確実に | 1 | 容易に | 1 |

「理解」には必ずしも正しい文法や発音が必要ではなく、「たとえ文法や発音が間違っても伝えようという意思があればコミュニケーションはうまく行く」といった趣旨の記述が多く見られた。具体的な英語使用の場面を想定している学生もあり、「道案内」(8回)「道を聞かれる」(13回)「海外に行った時」(12回)が最も多かった。対話の相手としては「外国人」(43回)「外国の方」(5回)が「ネイティブ」(12回)を上回っていた。参加した学生は、対話相手が必ずしもネイティブではないと認識していることが示唆される。さらに、対話者が母語話者か非母語話者かによって、表出するアイデンティティが異なることも明らかになった。前者では英語学習者アイデンティティ、後者は対等な L2 英語学習者/使用者アイデンティティである。

(2) 授業観察とフォローアップインタビューの結果

9つのグループディスカッションの結果は表 3 の通りである。発話回数と発話の長さには個人差が見られた。L2 英語を駆使し、流暢ではないが自分の意見を述べる努力をする日本人学生 FJ(S)、MJ(M)に対し、MJ(A)は発話の大半で yeah を多用し対話者への同意を示すことに終始していた。また、日本人学生だけでなく、留学生も相手の発話内容について質問や理解の確認を行うなどの意味交渉をほとんど行っていなかった。

表3 グループディスカッションのまとめ

| テーマ | グループ ^注 | 対話時間 | 全体の 発話回数 | 日本人学生の 発話回数(%) |
|-------------|-----------------------|--------|-------------|-------------------------------------|
| (1) 文法指導の効果 | FJ(S)・MA・FA | 9分42秒 | 78 | 19 (24.4%) |
| | MJ(M)・FPh・FF | 9分53秒 | 87 | 19 (21.8%) |
| | FJ(Y)・MT・FD | 11分20秒 | 78 | 13 (16.7%) |
| (2) 文法知識 | FJ(O)・MA・FD | 8分37秒 | 54 | 4 (0.07%) |
| | FJ(S)・FA・MT | 10分20秒 | 69 | 24 (34.8%) |
| (3) 英語学習の動機 | FJ(S)・MJ(M)・FA | 8分11秒 | 32 | FJ(S)=10 (31.2%) MJ(M)=7 (21.9%) |
| | FJ(O)・FJ(Y)・MA | 8分22秒 | 39 | FJ(O)=9 (23.1%) FJ(Y)=12 (30.7%) |
| | | | | |
| (4) アクセント評価 | MJ(A)・FA・FPh | 10分31秒 | 211 | 21 (0.09%) |
| | FJ(S)・FJ(Y)・NA・ MT | 10分12秒 | 65 | FJ(S)=8 (12.3%) FJ(Y)=21 (32.3%) |
| | | | | |

注：FJ=女性日本語母語話者（括弧内は匿名のイニシャル）、MJ=男性日本語母語話者（同）、FA=女性アメリカ英語母語話者、MA=男性アメリカ英語母語話者、FPh=女性フィリピン英語母語話者、FF=女性フランス語母語話者、FD=女性デンマーク語母語話者、MT=男性タイ語母語話者

記述式アンケートとインタビューから日本人学生が以下に記す問題に直面していることが明らかになった。

- (a) 母語話者、非母語話者に関わらず留学生は英語が上手いグループとみなす。
- (b) 留学生らの発話スピードについていけず、詳細まで理解できない。
- (c) 会話の流れを止めるのは避けたいので、聞き役になる。
- (d) 発話を理解する過程で議論は進み、自分の意見を述べるタイミングを逸する。
- (e) 分からない時に、一度聞いて、それでも分からなければ相手に悪いので諦める。
- (f) 話の内容を正確に理解しているかが最重要である。
- (g) 発話内容に自信がないので積極的に話せない。
- (h) 的外れな質問はしたくない。

(3) 考察と教育的示唆

本研究は、日本人英語学習者（大学生）がどのように「英語コミュニケーション」を解釈しているかを記述式アンケートで調査した。その結果、大半の学習者に共通するのは、相互理解・意思疎通がコミュニケーションの究極の目的であり、それを達成する条件は（母語話者を規範とする）正しい文法や発音ではなく、「伝えようとする気持ち」である。海外経験を持つ回答者には「現地ですたない英語でも何とかあった」というポジティブな体験がこの見解を強化している。また、大学入学までに6年以上英語学習をしたにもかかわらず思うように英語でコミュニケーションできないもどかしさが、文法中心の授業では本物（つまりコミュニケーションのため）の英語は学べないという誤った認識を生んでいる可能性がある（Shibata, 2019）。英語コミュニケーションの機会を外国人への道案内として捉えている学生が多いことは、2012年度の『グローバル人材育成戦略』に記載された「グローバル人材の5つの目安す」のうち「日常生活会話レベル」に相当する。政府は「グローバル人材」を段階的に育成するとうたっているが、日常生活レベル

から二者間/多数者間折衝・交渉レベルにどのように引きあげるかは今後の課題である。

実際の授業観察とインタビュー結果からは、日本人学生が EMI で直面する問題点が明らかになった。これまでも EMI 授業における日本人学生の英語力の不足が問題点として指摘されている(Aizawa & McKinley, 2020; Bradford & Brown, 2018 等)。本研究の結果も同様の問題を示している。しかし、上述した問題点のうち特に(g)と(h)は日本の教室文化に起因する可能性を示唆する。正解が求められ自分の意見を自主的に述べる機会がほとんどない日本の学校教育を通して、教師やクラスメートのお話を注意して聞き(Hyland, 2012)、正解でなければ発言しないという態度を構築させ、その態度がディスカッションでのコミュニケーションスタイルに反映されていると考えられる。さらに、非英語母語話者の留学生の英語力と積極的な発言は、日本人学生に、同じ L2 英語話者であっても対等の立場ではないことを認識させ、結果 EMI の教室に「日本人学生」対「留学生」と二分化を生んでいる。

これらの結果は、日本人大学生が他者との関わりの中で「英語学習者」「非英語母語話者」という立場でコミュニケーションに参加していると示唆する。これは国際化を図るための取り組みである EMI の効果的実践にも関わる問題である。日本人学生にとって有益な EMI を行うためには、英語力向上をねらいとする「英語の授業を英語で行う (Content-based learning (CBL)、Content-language integrated learning (CLIL)等)」から専門分野を英語で学ぶ EMC(English-medium courses)への橋渡しが必要である(Burgess, Gibson, Klaphake, & Selzer, 2010)。さらに、言語的側面の補助に加え、聞き役に回りがちな日本人英語学習者のインタラクションへの取り組みを改善する必要がある。これは英語の授業だけではなく、学校教科全般に関わるべき取り組みである。つまり、初等教育の段階から生徒が自ら考え意見を持つトレーニングを行うことが必至である。日本の高等教育の国際化は、こうしたエコロジカルな教育の実践により実現すると言える。

<引用文献>

- Aizawa, K., & McKinley, J. (2020). EMI challenges in Japan's internationalization of higher education. In H. Bowles & A. C. Murphy (Eds.). *English-Medium Instruction and the Internationalization of Universities* (pp. 27-48). Palgrave MacMillan.
- Bradford, A., & Brown, H. (2018). *English-medium instruction in Japanese higher education*. Bristol: Multilingual Matters.
- Burgess, C., Gibson, I., Klaphake, J., & Selzer, M. (2010). The 'Global 30' project and Japanese higher education reform: an example of a 'closing in' or an 'opening up'? *Globalisation, Societies and Education* 8, 461-475.
- グローバル人材育成推進会議 (2012) グローバル人材育成戦略(グローバル人材育成推進会議 審議まとめ) 1206011matome.pdf (kantei.go.jp)
- Hyland, K. (2012). *Disciplinary identities: Individuality and community in academic discourse*. Cambridge University Press.
- 文部科学省 (2015) 『英語が使える日本人の育成のための行動計画』「英語が使える日本人」の育成のための行動計画 (mext.go.jp)
- Shibata, M. (2019). Native speaker English vs. English as a lingua franca: Whose English is 'real' in and outside the classroom? *Asian English Studies*, 20, 74-94.
- 城座沙蘭 (2014) WE and Us: The transplantation and transformation of the world Englishes paradigm in the Japanese context. 東京大学大学院総合文化研究科博士論文.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 Shibata, M. | 4. 巻 - |
| 2. 論文標題 Japanese L2 English learners' positions in miscommunication: Who is responsible for failures? | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 Journal of Language, Identity, and Education | 6. 最初と最後の頁 - |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 3件）

| |
|---|
| 1. 発表者名 柴田美紀 |
| 2. 発表標題 EMC(English-medium classes)において日本人大学生が直面する問題点の考察 |
| 3. 学会等名 全国英語教育学会第44回京都研究大会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 柴田美紀 |
| 2. 発表標題 Identity choice in English-medium instruction (EMI) courses in Japanese higher education |
| 3. 学会等名 The 16th International Pragmatics Conference (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 柴田美紀 |
| 2. 発表標題 The Social Positioning of Self and Others in an English-taught Program: Voices from Japanese and International College Students |
| 3. 学会等名 大学英語教育学会第58回国際大会（国際学会） |
| 4. 発表年 2019年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
|--|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|